

高橋哲也(編)

《理学療法 NAVI》

ここに注目！

実践，リスク管理読本

評者 飯田有輝

JA 愛知厚生連海南病院リハビリテーション科/藤田医科大学・麻酔・侵襲制御医学

「リハビリテーションの主たる対象は臓器障害ではなく，臓器障害を持ったヒトである」。

心臓リハビリテーションの第一人者であり，わが国の内部障害系ならびに集中治療領域のリハビリテーションを先導してきた高橋哲也先生のメッセージを本書の随所で感じた。

リハビリテーションのリスク管理と言うと，多くの若手理学療法士は病態の進行や合併症発生への対処，転倒転落防止を考えるのではないか。あるいは病態の不安定な時期における離床や運動療法に伴うバイタルサインの変動を読みとるスキルを思い浮かべるかもしれない。臨床上いずれも重要な事項であることに間違いはない。実際，リスク管理をタイトルにもつ書籍には，適応や中止についてさまざまな基準や学会ガイドラインの記述が並ぶものが多い。

しかし，リスク管理は単にリスクとベネフィットのバランスから「やる」，「やらない」を決めることではない。病前の状態や疾病の重症度，病態の経過など「確定因子」を把握し，リハビリテーションによって加わる運動負荷や侵襲でどの程度リスクが生じるのかを予測し対処することに重点が置かれるべきである。

この点について本書では，病態，チェックポイント，対策について実に明解な要点が示されている。具体的には「リスクになり得る高齢者の特徴的症狀」，あるいは「患者とのファーストコンタクトで気づくべき『ポイント』」など，臨床症状や検査値，さらには視覚的容態からどこにどのようなリスクがあるのか，安全にリハビリテーションを実施するうえで何を指標にすればよいのか，とてもよく整理されている。さらに，そのリスクについて患者・家族に説明し，同意を得ながらリハビリテーションを進めていく重要さも説いている。冒頭の表現を借りれば，理学療法士は臓器障害のリスク管理だけではな

く，臓器障害をもつヒトのリスク管理に主眼を置かなければならない。

若手理学療法士にとって，本書が担当した患者の病態やリスクを解説するのに最適なのはもちろんであるが，加えて部門の管理者やリスクマネージャーにはぜひ，第1章「リスク管理の用語と基準」も一読していただきたい。理学療法士のリスク管理に対する考え方や位置づけについて大変わかりやすく書かれている。



A5 版・368 頁  
定価：本体 3,400 円＋税  
医学書院刊，2018 年